



## 今日のキーワード 中国は『AI』開発でも米国に猛追

米中対立は今やメディアで取り上げられない日がないくらいに激化しています。このところ米側のハイテク分野での対中強硬姿勢が目立っていますが、これは中国の技術開発の早さに対する米側の警戒心の表れだと考えられます。本稿では、中国の台頭が目立ってきている技術分野に焦点を当て、シリーズとして現在の米中の開発状況を確認してみます。4回目となる今回は、「人工知能（『AI』）」です。

### ポイント 2030年までに『AI』開発の世界トップを目指す中国

- 中国では近年、国家戦略として『AI』開発にも力が注がれています。2017年に中国国務院が発表した「次世代『AI』発展計画」では、2020年までに世界水準に追いつき、2025年までに一部の『AI』の領域で、さらに2030年にはすべての『AI』の領域で世界のトップに立つ、という目標が示されています。

### 【米国と中国の『AI』開発比較】

	米国	中国
特徴	開発は企業が中心。	政府が推進するが、実行は企業が中心。
企業・大学	ゴーグル、マイクロソフト、アマゾン等。 スタンフォード大学、マサチューセッツ工科大学等の大学もしっかりサポート。	テンセント、百度、ファーウェイ、アリババ等。
強み	大学や企業が、海外からの人材も含めて優秀な人材を引き付けていること。既に先行していること。	国家や地方レベルで政府のサポート。人材充実。個人情報情報が利用可能。人々の行動監視や医療データのアクセスが容易。
弱み	個人に関するデータは自由に使うことが難しい。	安全保障上の理由で地形図や天気図などの情報の利用には制約。

(出所) 各種資料から、三井住友DSアセットマネジメント作成

### 今後の展開 中国の規制緩和がポイント

- 2020年現在、基礎研究においては米国と中国の差はほとんどないと言われています。個人データ利用の制限の少なさが中国の『AI』研究の有利な点との指摘もあり、顔認証の『AI』システム開発などの面では中国の開発が米国に先行しているというのが一般的な見方です。
- 一方で、デジタル化、クラウド化、センサー化については、中国企業は米国に大きな後れをとっていると言われています。また、中国では安全保障上の理由で規制がかけられる分野もあり、今後の競争上の足かせになるリスクがあります。今後、中国が規制緩和をどこまで許容するかが、競争上のポイントになると見られます。

※個別銘柄に言及していますが、当該銘柄を推奨するものではありません。

ここもチェック! 2020年10月27日 米中で熾烈な開発競争となっている『自動運転』  
2020年10月20日 米中対立、『5G』技術で先行する中国、追う米国

■当資料は、情報提供を目的として、三井住友DSアセットマネジメントが作成したものです。特定の投資信託、生命保険、株式、債券等の売買を推奨・勧誘するものではありません。■当資料に基づいて取られた投資行動の結果については、当社は責任を負いません。■当資料の内容は作成基準日現在のものであり、将来予告なく変更されることがあります。■当資料に市場環境等についてのデータ・分析等が含まれる場合、それらは過去の実績及び将来の予想であり、今後の市場環境等を保証するものではありません。■当資料は当社が信頼性が高いと判断した情報等に基づき作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。■当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらの知的所有権その他の一切の権利は、その発行者および許諾者に帰属します。■当資料に掲載されている写真がある場合、写真はイメージであり、本文とは関係ない場合があります。